



## いしはし ひでの 石橋 秀野

明治42年(1909)～昭和22年(1947)

俳人。父・藪栖太郎、母・由栄の四女として奈良県山辺郡二階堂村(現・天理市)に生まれました。奈良県師範学校附属小学校を卒業後、家族とともに上京。

文化学院中学部に入学。学監・与謝野晶子に短歌を、高浜虚子に俳句を学びました。昭和4年慶應義塾大学生石橋貞吉(山本健吉)と学生結婚。家庭の事情により同学院本科を自主退学。昭和13年頃から本格的な句作に精進。その後俳誌『鶴』を代表する女流俳人として活躍します。

昭和17年長女安見誕生。昭和20年夫の島根新聞社勤務に伴い、松江に移住。翌21年夫が京都日日新聞社論説委員となったため京都に転居。その後肺結核と腎臓病を病み、昭和22年9月26日国立宇陀野療養所にて逝去。38歳。

没後、昭和23年第1回川端茅舎賞(現・現代俳句協会賞)を受賞。翌24年、夫健吉により句文集『櫻濃く』発刊。平成22年長女安見(山本安見子)により『石橋秀野の100句を読む』が上梓されました。



焼香するさだまさしさん

# 俳人・石橋秀野を偲ぶ

文化勲章受章者で八女市ゆかりの文芸評論家・山本健吉(本名石橋貞吉1907-1988)の最初の妻で俳人の石橋秀野の70回忌追善法要と偲ぶ会(健吉祭実行委員会主催)が9月26日(月)、石橋氏累代の墓がある無量寿院(本町)でありました。法要には長女の石橋安見さん、山本健吉と親交の深かった歌手のさだまさしさん、文化関係者ら約30人が参列。若くして亡くなった才能あふれる俳人を偲びました。

健吉の父で明治時代に文芸評論の草分けとして知られる石橋忍月(1865-1926)は黒木町湯辺田の出身で、忍月や健吉・秀野らが眠る石橋氏累代の墓は、地元文化関係者によって守られてきました。旧木下家住宅堺屋(本町)には健吉・秀野の夫婦句碑が建立されており、さださんは法要に先立

ちこの句碑も見学しました。

安見さんは「祖父忍月や父健吉を八女の方々が大切にしていた

だいていることには大変感謝しています。また、50年もの間封印されてきた母秀野の句が、広く知られるようになることをうれしく思います」とあいさつ。主催した健吉祭実行委員会では、「受け継がれて開花した秀野の文才が、時代を超えて共感を呼んでいます。改めてその広がりをご縁を大切に、八女から文化の輪をさらに広げていきたい」と話しました。



あいさつをする安見さん

## 山本健吉・石橋秀野 めおと夫婦句碑

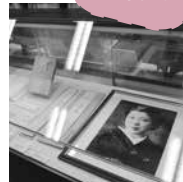


旧木下家住宅「堺屋」

「こぶし咲く 昨日の今日となりしかな」 健吉  
「蟬時雨 児は擔送車に追いつけず」 秀野  
平成11年5月7日健吉の祥月命日に除幕(山本健吉・石橋秀野句碑建設委員会 会長・今里允昭)されました。碑文はともに二人の絶句で代表作。秀野の句は直筆、健吉の句も原稿等から一字ずつ選び出されています。

## 山本健吉資料室

八女市立図書館



山本健吉と石橋秀野の遺作品等を展示する「山本健吉資料室」が平成26年10月、八女市立図書館の2階にオープンしています。石橋家から寄贈された貴重な写真や直筆の原稿、愛用品などを展示。夫妻がともに展示されている資料室は全国でもここだけです。ぜひ訪れてください。